

被排斥者への共感による心理的痛みの伝染

(中間報告)

長崎女子短期大学幼児教育学科 中 島 健一郎

Infection with social pain by empathizing with excluded individuals

Preschool Education Section, Nagasaki Women's Junior College NAKASHIMA, Ken'ichiro

要 約

現状の保育者養成では、保育者が子どもの存在を受け止め、子どもの心持ちを感じ取ることが重要視されている(無藤, 2007)。しかし、子どものさまざまな心のありようを共に感じようとするのが、結果として保育者自身を苦しめることにつながるかもしれない。具体的には、人とかかわりの中で傷ついた子どもに共感を示すことによって、保育者もまた心に傷を負っている可能性がある。このような心の傷の“連鎖”は実際に存在するのであろうか。本研究は、この問いを出発点とした上で、(1)被排斥者に共感を示すことによって、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか、そして仮に心理的痛みが伝染する場合、(2)その痛みをどのように制御すれば良いのか明らかにする。これらの点について検討するために、本研究では会話実験を行い被排斥者の様子を撮影する。その上で、被排斥者に対する共感を題材とした準実験を行う。本論文では、中間報告として会話実験の詳細について報告する。

【キー・ワード】 共感, 社会的排斥, 心理的痛みの伝染

Abstract

It is important for nursery teachers to accept and understand the feelings of children. However, doing this may result in suffering and injury to teachers themselves, particularly when they empathize with children suffering from social pain caused by social exclusion. Firstly, I investigated whether social pain can be infected through empathizing with excluded individuals. Secondly, I examined how the infected pain of empathizing individuals can be reduced and their maladaptive responses be regulated. I conducted an experiment using conversations and a film of ostensibly excluded individuals was made. In the future, a quasi-experiment will be conducted in which this film would be shown to participants that have been requested to empathize with the excluded individuals. In this paper, the conversational experiment was reported as a pilot study.

【Key words】 empathy, social exclusion, infected social pain

問 題

子どもに共感し、その存在を受け止めることは保育の最も基礎にあることである(無藤, 2007)。とりわけ、保育者は、他の子どもからいじめられたり、遊びの仲間に入れてもらえなかったりした子どもの心の痛みに関心し、受け止めることが求められる。なぜなら、そのような保育者の存在が子どもたちの心の傷を癒し、子どもたちがあらためて人とのかかわりの中に赴くことを促すためである(森下, 2007)。

しかしながら、このような被排斥者への共感プロセスの中で、看過できないひとつの現象が生じる。それは **empathy gap** である。**empathy gap** とは、排斥された個人が感じた心理的痛みを、それ以外の人々が低く見積もってしまう現象である(Nordgren, Kasia, & MacDonald, 2011)。保育場面で例えた場合、これは仲間外れにあった子どもが感じた心の痛みよりも、保育者が推測した痛みの程度が小さいという形で表れる。つまり、保育者は“そのような出来事に遭遇したら、確かに辛いだろう”と考えるものの、その辛さの程度を子どもが実際に感じているものよりも軽く捉えてしまう。このズレが傷ついた子どもに対する不十分なケアを引き起こす可能性がある。

では、**empathy gap** はどのように低減すれば良いのであろうか。先行研究では **experience sharing** に基づく共感がその解消に有効であることが示唆されている(Zaki & Ochsner, 2012)。**experience sharing** とは共感のあり方のひとつであり、具体的には共感する側の個人が被排斥者の心理的痛みを共有することである。これは“あなたの痛みは私の痛み”として考えることと比喩される。一般に、人々は恋愛パートナーや友人に **experience sharing** に基づく共感を示すことが報告されている(Feeney & Lemay, 2012; Meyer, Masten, Ma, Wang, Shi, Eisenberger, & Han, in press)。

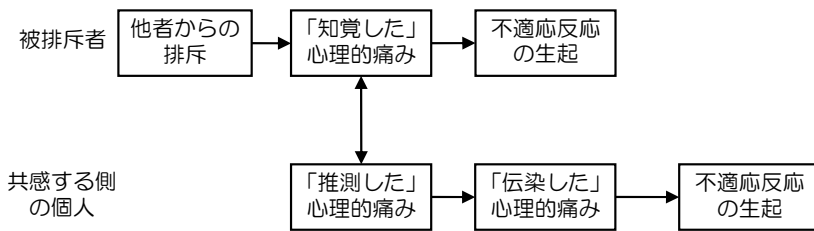
しかしながら、**experience sharing** に基づく共感、共感する側の個人に一定の犠牲を強いる可能性がある。この点に関して、脳機能画像研究では排斥された友人に対して共感する場合、共感する側の個人において前部帯状回背側部(dorsal anterior cingulate cortex)の賦活が認められることが示されている(Meyer et al., in press)。さらに、Meyer et al. (2012)は排斥された他人(stranger)に対して共感を示す場合には、この賦活が認められないことを示している。また、他の研究では他者から排斥されたときに前部帯状回背側部が賦活するだけでなく、その賦活の程度が被排斥者の心理的痛みと正の関連を示すことが確認されている(Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003)。これらの知見に加えて、Feeney and Lemay (2012)の知見を考慮すれば、**experience sharing** を通して、上述した比喩が実際に現象として表れる、すなわち共感する側の個人に被排斥者の心理的痛みが伝染することが予測される。さらに、被排斥者が自己調整に失敗する、攻撃性を高める、あるいは他者との接触を避けるといった様々な不適応反応を示す傾向にあること(Smart Richman & Leary, 2009)より、心理的痛みの伝染に伴って共感する側の個人もまた不適応反応への傾性が高まることが予測される(図 1)。

現在の日本では保育者がワークストレスを抱えやすく、そのために園児と十分なかかわりを持つことが難しくなっている(西坂, 2002; 坂田, 2000)。このようなストレスフルな状況の中で、さまざまな個性を持つ子どもたちに対して共感的な態度を示すのは必ずしも容易なことではない。さらに、これまでの保育者養成では、**experience sharing** に基づく共感が推奨されている(無藤, 2007)。もし

experience sharing が心理的痛みの伝染を引き起こすことが明らかになった場合、保育者は排斥された子どもに対して共感的に接することによって、自身もまた同じように心に傷を負うことになる。つまり、ストレスフルな状況に置かれながら、その中で保育の基礎を大事にしている保育者ほど傷ついた子どもたちと積極的にかかわる。そして、一連のかかわりの中で自らを排斥の脅威に晒している可能性がある。

以上より、本研究では、まず排斥された友人に共感を示すことによって、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか検討する。この点について検討するために、本研究では会話実験を行い被排斥者の様子を撮影する。その上で、被排斥者と同じクラスに所属する学生を対象とした準実験を行う。以下では、中間報告として会話実験の詳細について報告する。なお、本研究の次なる目的は、仮に心理的痛みが伝染することが示された場合、その痛みをどのように制御すれば良いのか明らかにすることである。この点については、本研究の最終報告を行う際にいくつかの示唆を提供したいと考えている。

友人への共感プロセス



他人に対する共感プロセス

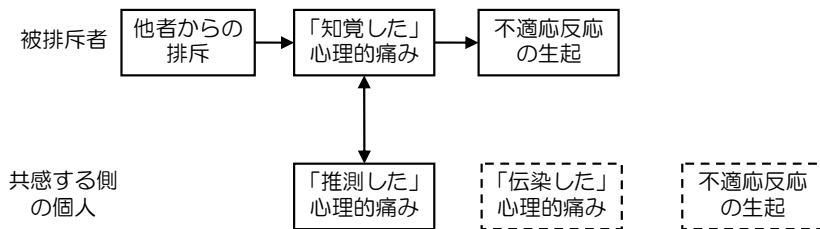


図1 被排斥者への心理的痛みの伝染に関する検討モデル

方 法

実験参加者 保育者養成校に所属する女子短期学生 12 名(うち、8 名は実験協力者)。

会話実験のメンバー構成 実験参加者が所属する学科は、授業カリキュラムの都合上 YA クラスと YB クラスに分かれている。そのため、講義形式の授業には合同で参加するものの、演習形式の授業にはクラス別に参加する。当初、会話実験は同一クラスに所属する 6 名をひとつのグループとして行う予定であった。しかしながら、YA クラスの参加予定者(1 名)が実験をキャンセルし、それに伴って

YB クラスの学生を 1 名加配したために各クラスの参加者数に偏りが生じた。具体的には、ひとつのグループ(以下、グループ 1)が YA クラスの学生 5 名と YB クラスの学生 1 名、もうひとつのグループ(以下、グループ 2)が YB クラスの学生 6 名であった。

実験実施日 実験実施日は 2012 年 7 月下旬であった。

実験手続き それぞれのグループの 2 名が他の学生から受容される場面(以下、受容場面)、そして他の学生から排斥される場面(以下、排斥場面)を撮影した。この 2 名は無作為抽出によって選定した。会話実験の具体的な方法を以下に示す。

事前説明 上述した 4 名(各グループ 2 名)以外の参加者に実験内容について事前説明を行い、協力を依頼した。具体的には、受容場面では 6 人で仲良く会話を行うこと、特に 6 人の中で会話に参加できない人が生じないように、会話の文脈に配慮するように伝えた。排斥場面では、2 人 1 組のペアになるときに誰が誰とペアになるのかを予め決めた上で実験に参加するよう求めた。さらに、ペア決めの最中に“ペアになれなかったら少し悲しい”、“ゲームのためとはいえ緊張する”といった会話を行うように伝えた。

実験概要の説明 グループのメンバー 6 名を小講義室に集めた上で、会話実験の概要について説明した。上述したように、6 名中 4 名が実験協力者であり、2 名が実験参加者であった。今回の実験では 2 つの会話ゲームを行うこと、そしてその様子を撮影することを伝えた。実験協力者・参加者から了承を得た後、全員の表情を撮影できる場所にビデオカメラを設置し、撮影を始めた。

受容場面の撮影 会話ゲームの例として古今東西ゲームをあげた上で、メンバーでどのようなゲームを行うか自由に考えるよう求めた。その上で、メンバー全員で楽しみながら会話ゲームを行うよう求めた。ゲームの実施時間は 10 分程度であった。

排斥場面の撮影 受容場面の撮影が終わった後、引き続き実験者が提案したゲームを行うよう求めた。そして、そのゲームのために 2 人 1 組のペアを作る必要があることを伝え、ペア決めの方法について説明した。具体的には、メンバーの中で誰とゲームをしたいか投票を行った後、実験者がそれぞれの希望者を別室で確認する。お互いにペアになることを希望していた場合、すなわち“両思い”であった場合、そのメンバー同士がペアとなる。さらに、残りのメンバーで再び投票を行い、3 ペアが成立するまで投票と結果開示を繰り返すと教示した。

実際は、実験協力者同士でペアになるよう依頼していたために、1 回目の投票で 2 ペアが成立した。しかし、この方法では実験参加者同士がペアになり、3 ペアが成立する可能性が残されている。そこで、今回の実験では実験参加者の親友を実験協力者に配置することで参加者同士がペアになることがないようにした。その上で、実験協力者同士の 2 ペアが成立するところまでを撮影した。ペア決めの後、ディブリーフィングを行い、会話実験を終了した。

今後の計画

撮影したビデオから、各場面3分程度の実験刺激を作成する。その上で、実験刺激を用いた準実験を実施する。準実験では、会話実験の参加者のひとりを被観察者と設定し、被観察者が受容場面と排斥場面の各々でどのような気持ちだったか推測するように求める。この際、被観察者の所属クラスと準実験の参加者の所属クラスを同一にすることで被排斥者が参加者にとって他人(stranger)とならないように操作する。準実験の手続き、ならびに検討結果の詳細については最終報告書に記載する。

引用文献

- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., Williams, K. D., (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, **302**, 290-292.
- Feeney, B. C., & Lemay, E. P. (2012). Surviving Relationship Threats: The role of emotional capital. *Personality and Social Psychology Bulletin*. **38**, 1004-1017.
- Meyer, M. L., Masten, C. L., Ma, Y., Wang, C., Shi, Z., Eisenberger, N. I., Han, S. (in press). Empathy for the social suffering of friends and strangers recruits distinct patterns of brain activation. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*.
- 森下葉子 (2007). 第3章 子どもと保育者のかかわり 岩立京子(編) 領域人間関係：事例で学ぶ保育内容 萌文書林 pp.57-82.
- 無藤隆 (2007). 第1章 幼児教育の基本 岩立京子(編) 領域人間関係：事例で学ぶ保育内容 萌文書林 pp.11-32.
- 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究, **50**, 283-290.
- Nordgren, L. F., Kasia, B., & MacDonald, G. (2011). Empathy gaps for social pain: why people underestimate the pain of social suffering. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 120-128.
- 坂田和子 (2000). 保育者の精神的健康に関する研究—保育所職員の日常的ストレスについて— 聖心ウルスラ学園短期大学紀要, **30**, 65-71.
- Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multimotive model. *Psychological Review*, **116**, 365-383.
- Zaki, J., & Ochsner, K. (2012). The neuroscience of empathy: progress, pitfalls, and promise. *Nature Neuroscience*. **15**, 675-680.

